

紙幣でみる近現代

活動場所：6年1組教室

10月23日（金）13：55～15：00

五十嵐 徳也

1 活動のねらい

お札の肖像になっている近代の人物やその時代にあった出来事について調べたり、情報やその解釈を共有したりすることを通して、近現代に対する自分の考えをつくる。

2 活動設定の意図

江戸時代、越前福井藩によって、藩内のみ通用する紙幣が初めて発行され、以後藩札は全国各地へと広がった。明治の世となり、政治体制が大きく変化する中で兌換券としての紙幣が発行されるようになった。

これまでの紙幣の肖像となった人物は、全部で18名。人選については、紙幣発行時の日本の情勢が大きくかわっていると考えられている。本活動では、現在の紙幣の肖像となっている3名の人物と、2024年から採用される3名の計6名の人物を対象とする。いずれも明治時代後期から大正時代にかけて活躍した人物である。子どもは、肖像となった人物について調べ、壁新聞やレポート、プレゼンテーションなどにまとめていく。

福沢諭吉は当時の言論界のリーダーとして、野口英世や北里柴三郎は医学の世界において世界的に活躍した日本人として、渋沢栄一は多種多様な会社の設立等に関わり日本経済界をつくり支えた人物として。肖像の人物を調べていく過程で、選出されたわけなどが子どもの中で少しずつ明らかになっていくだろう。樋口一葉と津田梅子については、女性の社会進出の象徴として採択され、女性の活躍への期待を示しているなどと想像できると考える。人物の選出に意図があることが分かれば、子どもは、他の人物についても何かしらの意図があるのではないかと考え始めるだろう。紙幣の肖像画を見つめることで、近代の人物の業績を新しい令和の時代とつなげて考えることができるのである。また、永く続いた封建的な身分制度に重きを置く一方で戦乱を避けることができた江戸時代から一変、大きな変革の時代となった近代に活躍した偉人の業績を知ること、近代についてはもちろん、現代社会を見つめる視座をも得ることができるのである。

3 子どもの「問い」が立ちあがる環境

○ 紙幣の肖像となっている人物を全員調べる

紙幣の肖像画となった人物の生い立ちや業績を調べて整理していくことで、日本の歴史の中で近代がどのような時代だったのかを概観することができる。子どもは、6名の人物に関する書籍をすべて読み、すべての人物について学ぶ。学んだあとは、6名の中から1名を選び、紙にまとめたりプレゼンテーションにしたりする。お互いの調査を共有することで、自分が調べた人物だけではなく、仲間がまとめた調べた人物についても知ることで自ずと比較し、近代とはどういう時代だったのかを考え始めるだろう。

○ 新しい紙幣の肖像となっている人物を比較する

少し先にはなるが、2024年には新しい紙幣が発行される。新時代の紙幣の肖像画としてふさわしいと判断された人物を中心にしながら考えることで、令和の時代がどのような時代になってほしいと願われているのかについて考えるだろう。その姿は、まさに温故知新と言える。一方で、これほど活躍した人がいたのに、なぜ日本は戦争へと向かってしまったのか新たな疑問をもつ子どももいるかもしれない。

人物を見つめたり比較したりしながら時代を概観することで、別の時代や現代と結びつけて考える子どもの姿が表出すると考える。

「紙幣でみる近現代」(全15M)

第1次 近代を概観する(4M)

- ・教科書や資料集から、近代を俯瞰する。

第2次 紙幣の今昔(1M)

- ・古代の貨幣や近代の紙幣について調べる。

第3次 人物を比べながら調べる(7M)(本時)

- ・肖像画の人物を調べて、新聞やレポート、プレゼンにまとめる。
- ・近代を生きた人物を比べ、肖像のモデルになった理由について予想する。

第4次 人物をまとめる(3M)

- ・調べたり話し合ったりしてきたことをまとめる。

4 対象とかかわる子ども

子どもは、教科書や資料集を用いながら、西洋文明を取り入れることで日本が近代化していく様子や、自由民権運動の隆盛で憲法が作られたり国会が開かれたりすることを進歩としてとらえている。そういった進歩の1つとして紙幣の登場を知った子どもは、今、当たり前前に流通している紙幣が明治時代にできたことに驚いた。また、紙幣に登場する人物について調べ、近代に活躍した人が多いことに気付き、その人物について詳しく調べることになった。6名の人物全員の業績を記した書籍を読み、個人で追究しながら人物を比較しながら考え始めている子どもは、その過程で生じた疑問について話し合ったり考えを共有したりしたいと願い始めている。

5 本時の構想・展開

(1) 本時のねらい

紙幣のモデルとなっている6名の人物の業績から、その人物が選ばれた理由について考えたり、考えたことを共有したり議論したりすることを通して、近代に対する自分の考えをつくる。

(2) 本時の構想

○ 6名の業績から、選出された理由について考える

子どもは、紙幣のモデルとなった6名が選出された理由や、金額の差について考え始めている。本時は、選出された理由について、事実を基にして推測していく。生き方に理由があるのか、活躍した産業分野に思いが込められているのか、これまでのモデルのことも含めて予測していくだろう。子どもは、歴史人物から現代にも普遍的な価値を見出したり、近代という長い時代を面で見つめたりしていく。

(3) 本時の展開 11・12M/全15M(65分)

時間	番号;子どもの活動 ・ ;子どもの姿	○ ;教師の手立て
30	1 6名の人物を比べる <ul style="list-style-type: none"> ・ 渋沢栄一だけが少し違い、会社関連の仕事をしているところが特徴的だ。 ・ 外国への留学経験がある人が多い。 ・ 研究所や大学、会社などをつくっている。 ・ 紙幣の金額と人物の選出には関係あるかもしれない。 ・ 五千円札のモデルは、どちらとも女性。女性の活躍を期待している。どうして一万円札ではないのか。 ・ 千円札のモデルは、どちらも医学。これからの世の中で医学的な発明に期待されているのかもしれない。 ・ 千円札には、より世界的な活躍をした人物が選ばれているのかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまで蓄積した感想やメモ等を見ながら発言したり聞いたりするよう促す。 ○ 金額との関連性について、子どもの感想の中から生まれた疑問であることを伝える。
25	2 6名の人物が全員近代の人物である理由を考える <ul style="list-style-type: none"> ・ 女性が活躍し始めていたのが近代である。 ・ 産業や学問がどんどん発達し、その過程で人材が出てきた。 ・ 江戸時代から大きな変化を遂げる時期だった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループトークの形式をとり、議論が活発になるようにする。
10	3 活動をふり返る <ul style="list-style-type: none"> ・ お札の肖像画になった人同士がつながっていると感じた。偉人は、一人で何かを成し遂げたわけではないということが分かった。 ・ 目標をもち、その目標に懸命に突き進む姿が共通している。近代は、世の中をよりよくしようとしている人がとても多い時代なのかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「紙幣で見る近現代」を通したふり返りとなるよう、これまでの活動の経過を整理する。 ○ 数名の子どもを指名し、考えたことを共有する。

6 活動の振り返り

(1) 子どもの学びを真ん中に

「野口英世さんは、日本のために尽くした人で
す」奈菜生さんは、書籍資料を読んで自分なりの
野口英世の解釈について発言した。「野口って、
日本のために尽くした人なのかな」「確かに、感
染症に対して研究を重ねたけれど、それって、日
本のために尽くしたことにはならないと思う」奈
菜生さんの発言に対する子どもの違和感が次々
に表出した。奈菜生さんは、書籍資料を読んで、
現代を生きる自分や日本人にとっての解釈を話
していた一方で、それを聞いた仲間は、実際に野
口が積み重ねてきた業績を野口の側からとらえ
ていた。



子どもは、前時までに、紙幣に登場してくる6
人の人物について書籍資料で調べてきた。一人一
人がとらえる人物像は人によって様々であるが、
決定的に違ったのは、現代を生きる自分を主語に
して人物の業績を捉えている子どもと、その人物
を主語にして業績をとらえている子どもがいた
ことである。そのズレは小さいようで非常に大き
いことだと、活動の冒頭で気が付いた。その後、
「樋口一葉さんは、女性でも立派に働いていくこ
とを証明したい人だと思う。」と奈美さんが話す
と、すかさず優さんが「樋口一葉さんは、女性で
も立派に働けることを示しているのではないと
思います。自分が生きるために、必死になって小
説を書いていたように思います。」ここにも先ほ
ど挙げたズレが生じていた。書籍を読むという行
為自体は同じである。しかし、そこに書かれてい
る情報をどのように受け取るかは子どもによっ

て違うことを如実に示している。

本活動を通して、読みながら学んだことを記録
してもよいことを子どもに伝えるとともに、毎時
間の最後に学んだことや感じたことを書き記す
ように話していた。記録からは、子どもが誰の立
場で何を考えているかを読み取ることができた。
こうした子どもの行為の質の違いを「ロイロ・ノ
ートスクール」に蓄積された学びの記録を見取る
ことで、事前に子どもの考えをとらえることがで
きた。このように積み重ねられた子どもの学びの
道筋を追うことで、子どもの行為の変容を見取り、
その先を思い描きながら構想をつくり変えたの
である。当然、活動案を作成する際に活動構想は
しておくが、活動を進めていく中で大なり小なり
ズレが生じてくる。子どもが、今何を考えてい
るのか、どの立場からそれぞれの人物を見つめて
いるのか、どの順番で資料を読んでいるのか。こ
うした一人一人の子どもの学びを常に把握するこ
とに努めた。そうでなければ、子どもの「問い」
が立ちあがる姿を見続けることは不可能だから
である。

本時の活動では、冒頭に一人一人の業績につ
いて丁寧に整理しながら、事実とその事実に対す
る捉えを区別していくことに多くの時間を費やし
た。その活動が、一人一人の学びを再構成するこ
とに寄与すると考えたからである。子どもの学び
の再構成は、子どもが主語であり、子どもの学び
が中核になればできないのである。再構成する
ための共有の場の議論にズレが生じてしまっ
ては、共有にはならない。つまり、子どもの「問い」
が立ちあがる姿を真の意味でとらえられないの
である。

(2) 歴史観をつくる子ども

本時の活動の最後に「なぜ、肖像のモデルは6
人とも明治の人間なのだろうか。」と問うた。こ
のような課題意識をもっている子どもが数名い
たが、多くの子どもが潜在的にもっていた問いだ
と考えていたからである。一人一人が選ばれた理
由については、皆が考え、自分なりの考えもも
っていた。そこで、私は広く「明治」と時代でく

ることで、子どもの考えをより大きな考え方につなげたり抽象化したりすることにつながるのではないかと考えた。その過程で、時代観や大きな歴史観が生まれるのではないかと思いついたのである。子どもは、そこまで議論してきたことや自分で調べたことを総合的に考え始めた。



煌哉さんは、自信ありげに「だってさ・・・」と長々と説明していた。「津田梅子さんの考えていた女性が活躍する社会は今まさに起きていることだと思う。日本の首都のトップが女性になるほどに変わってきているのだから。他の人物についても同じことが言えるから、この6人の活躍は現代の常識をつくっていると思う」というのである。煌哉さんの語り口からは自分の考えに対する自信がにじみ出ている。

下を向きながら、優さんは、「先生、難しいよ。答えてあるの」とすっきりとしない表情で話していた。難しいと話している優さんも、より深く考えていたため悩んでいたのである。活動後に話を聞くと、「だって、近代ってこんな人物がもっとたくさんいたはず。その中から、この6人になった理由ははっきりとは言えないよ」というのである。6名の業績から、明治時代が大きな変革の時代であることを理解し、他にも優れた人材がまだたくさん生まれていたであることを推測した。つまり、歴史観を構築したが故に生じた迷いであったと言える。

資料が漫画であったとはいえ、6名に関する書籍をすべて読んだ子どもの情報量は既に一般的な大人よりも多い。自分の中に溜めた情報を基に、自分の捉えについて話し合っていたわけである。

子どものこれまでの学びについて振り返り、自分の歴史観を見つめ直すとともに、自分の学びを再構成する機会となった。

(3) 実践教科活動という提案

歴史的事象に入り込んでとらえる子ども、今の自分とかかわらせながらとらえる子ども、人物から世界観をつくって時代をまるごととらえる子ども。学びの様相は一人一人異なるのである。教師は、学びによって変容する子どもの行為の連続を見取り、子どもの側からとらえる。実践教科活動では、子どもの実践＝行為を主軸に置いて構想する。だからこそ見えてくることがある。実践教科活動は、そうした子どもの学び方の提案であり、教師の手立ての在り方を考え抜く営みなのである。

〈メールにて本活動に関するご質問、ご意見、ご感想をお寄せください〉

提案者連絡先 itokuya@juen.ac.jp (五十嵐徳也)